

地域情報（県別）

【東京】「認知症になっても安心できる町へ」大学教授が実家を改装して患者向け施設を運営-繁田雅弘・東京慈恵会医科大学精神医学講座教授に聞く ◆Vol.2

クラファンで563万円、バリアフリー化やトイレ・キッチンを改修

2023年9月8日（金）配信 m3.com地域版

「患者視点の医療」をモットーとする東京慈恵会医科大学精神医学講座の繁田雅弘教授は2019年、神奈川県平塚市にある実家を改装し、認知症の患者や家族が集える施設「SHIGETAハウス」を開設した。施設では認知症カフェだけでなくさまざまな企画を行っており、現在は参加者の主体性が高まったことで活動はより多彩になっているという。大学教授が地域活動に取り組み始めてから4年、その変遷と現在を聞いた。（2023年7月7日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら



繁田雅弘氏

——過去の取材記事によると、繁田先生は2019年、認知症の人やその家族が集える施設「SHIGETAハウス」を神奈川県平塚市に開設したといます。元は先生の実家だとか。

「認知症になっても安心して暮らせる町づくり」をコンセプトに、地域のさまざまな人の協力を得て、実現しました。きっかけは2017年、私の母に認知症の症状が現れ始め、家で暮らすのが難しくなったことにあります。一人暮らしをしていた母が高齢者施設に入所したことで家は空き家になり、空き巣の被害にもあうようになりました。このままでは不安心なので、「何か良い活用方法はないだろうか」と思案していたところ、母の主治医だった内門大丈（ひろたけ）先生が良いアイデアを出してくれました。

「先生、それなら皆の会合に使いませんか」。内門先生は私と同じで認知症を専門とする精神科医であり、多職種連携が重要な在宅医療を行っていたこともあって、地域の医療・福祉職とのつながりが豊富でした。看護師や薬剤師、保健師、社会福祉士、介護福祉士、平塚市の行政職員と地域包括支援センターの職員のほか、編集者や元テレビディレクター、弁護士や税理士といった他業種の人も加わってくださり、意見交換を重ねるなかで施設のコンセプトや機能が固まってきました。

——施設の開設に当たっては、クラウドファンディングも行ったそうですね。

当時の実家はちょうど築50年で老朽化が進んでいました。資金集めにクラウドファンディングという方法があることをメンバーから聞いた私は調べたところ、医療分野でも行われており、大きなお金が動いているケースもあることを知りました。実際に行ってみると、思ったよりもこれは大変でしたね。どんな情報や思いをどんな文章でいつ発信

していくかなど、予想以上に考えたり工夫したりすることが多くて。結果的に563万円ものお金が集まり、バリアフリー化やトイレ・キッチンの改修などに使わせていただきました。

開設に当たっては熱意のある人たちがボランティアで動いてくださったので、本当に人に恵まれたと思います。メンバーの多くは私がそれまでに書いた本などを読んでくださっていました。私が大切にしている「患者さん視点の医療」に共感してくださった面もあるのかもしれない。



SHIGETAハウスの外観（本人提供）

——SHIGETAハウスのホームページや現場取材した記事によると、活動内容が幅広く、また自由な雰囲気を大切にしているように感じました。

認知症の人とご家族、施設スタッフが交流する「平塚カフェ」を毎月2回開いており、それ以外にも私が認知症について教え、認知症ケア専門士の単位を取得できる「SHIGETAの学校」、音楽教室の元校長とウクレレを弾くなどして音楽を楽しむ「音LOVE」、平塚市の農園の協力で農業体験ができる「土と畑」を行っています。施設内には卓球台を置いているのでそれで遊んだり、近くの中学校の生徒と園芸を楽しんだりする企画もあります。

平塚カフェはいわゆる「認知症カフェ」の一つですが、何か決まったプログラムを行ったり、私が講演したりすることはありません。参加者が自由に会話を楽しむことを大切にしています。私は、「特定の人がものを教える」スタイルがあまり好きではないんですね。参加者同士でざっくばらんに話したり、耳を傾けたりする方がよっぽど本音が出やすい。それに、たとえ認知症を抱えていても、それまでの人生で何かに熱中したり、技術を高めたりしてある分野に習熟している人が少なくありません。役割を作らずとも、私たちはお互いに学び合うことができます。

——平塚カフェの参加者について、年代など特徴は。

40～80代の認知症の人やご家族が毎回10人ほど参加しており、スタッフを含めて計15人ほどがカフェ開催時にはいます。施設とはいえ普通の民家なので、居間と応接間を使ってこれくらいの人数でいっぱいです。

中でも、65歳未満の若年性認知症の人も参加しているのは特徴ではないでしょうか。社会的な側面も踏まえ、若年性認知症の人は高齢の認知症の人に比べ、家で静かにしていることがより不自然に映りやすいものです。誰かと話したくても病院の待合室ではできませんし、かといって介護保険を利用しておじいちゃんやおばあちゃんと手作業するのは楽しみを感じづらいでしょう。居場所をなくしてつらい思いをしている人もいるわけで、「施設の必要性が最も高いだろう」と開設前に考えていたのがこの層でした。

——2019年7月の開設からちょうど4年が経ちます。平塚カフェの雰囲気や動きで変化はありますか。

参加者がより主体的になってきたように思います。お花見会やバーベキュー、納涼会、競輪観戦……。今日（取材日の7月7日）はちょうど日本3大七夕祭りの一つである「湘南ひらつか七夕まつり」が平塚駅前で開催しましたが、参加者はこのイベントにも参加しており、皆でアイデアを出し合って七夕飾りを作り、通りに飾り付けました。一戸建ての施設には小さな庭もあるので、線香花火をしたときにイカやトウモロコシを焼いてちょっとしたお祭り気分を楽しんだことも印象的です。

カフェの内容は屋内での会話や交流が主ですが、お花見をしたい人たちは連れ立って外出し、新聞を読みたい人などは屋内でゆっくり過ごす、といった形も生まれており、活動や雰囲気になやみやすさや彩りが増しているのはうれしいこと。参加者の楽しみの幅も広がってきているのではないのでしょうか。



平塚カフェのオープニングの様子（本人提供、中央は内門医師）

◆**繁田 雅弘（しげた・まさひろ）氏**

1983年東京慈恵会医科大学卒。1995年同大精神医学教室講師。2005年に首都大学東京（現東京都立大学）健康福祉学部の教授・学部長に就任し、2011年からは副学長を務めた。2017年に慈恵医大に戻り、精神医学講座の教授に就任。日本認知症ケア学会理事長など。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

